—特集　追悼・三上一夫—

三上一夫先生遺稿

[三] 満州事変の歴史的性格についての一考察

一　課　題

関東軍参謀石原莞爾の世界最終戦争論に視点をすえた場合、満州事変さらに満州国成立がどのように具体化し、ついで石原が日中戦争に反対する方向をたどれば、果たして前大戦のような悲劇的な結末を迎えるかどうかの課題意識をしっかりふまえて検討することにする。

二　石原莞爾の世界最終戦争論

関東軍参謀石原莞爾中佐は、昭和六年（一九三一）九月十八日柳条溝の南満州鉄道線路を爆破し、張作霖爆死事件を引き起こして、これを口実に関東軍は総攻撃を開始し〈満州事変と呼称〉、ほぼ満州全域を占領。

ところで石原戦争哲学によれば、戦争を始めた場合は、できるだけ早期に戦争をやめることで、国益を精いっぱい低下させずにすませるとの論理を展開するわけである。したがって石原としては、満州事変後は、戦争には反対で、日中戦争にしても反対の態度を表明する。論理学で重視する「止揚（アウフヘーベン）」することで、見事矛盾点を克服するのに注目したい。その後は東条英機との対立により、大戦後の戦犯指名をまぬかれている。

三　満州事変勃発の背景

前述の昭和六年（一九三一）九月十八日の柳条溝の張作霖爆殺事件に起因する満州事変において、張作霖の子張学良は国民政府に追従して日本に抵抗する態度を示したが、これに対して、軍部〈関東軍〉を中心に、満州占領を強行しようとする機運が高まった。

政府は不拡大方針をとったが、現地軍〈関東軍〉はそれを無視して、翌昭和七年一月までにほぼ東三省全域を占領、同時に関東軍に自治指導部を設置し、その手先に独立運動を起こさせ、同年三月一日満州国建国宣言が発せられたのである。

四　満州国創設にかかわる関連的把握

昭和七年（一九三二）三月、日本は清朝の最後の皇帝愛新覚羅溥儀を担ぎ出し満州国を建国する。

もともと満州地域は中国とはいっても、漢民族の支配する地域ではなく、満民族（清などの王朝をつくっていた民族）の住む地域であったから、一応筋だけは通っている。とはいえ、満州国の政府は、関東軍の意のままに動く者で固められ、政治は関東軍の意のままに行われたから、満州国は、日本の傀儡（操り人形）政権といえよう。

翌八年（一九三三）国際連盟が満州国創設を否認すると、日本は連盟を脱退した。満州国を認めたのは、ドイツ・イタリアなど数か国に過ぎなかった。

総　括

関東軍参謀石原莞爾中佐は戦争を始めた場合は、仲介国を通じて、できるだけ早期に戦争をやめることで、国益を精いっぱい低下させずにすませるとの論理をふまえ、満州事変後の日中戦争には断乎反対したが、この点、太平洋戦争の指導者が一億玉砕論を唱えたことには、全く相いれないものがあったといえる。

ところで満州事変～満州国成立にかかわる歴史的性格を考えた場

合、石原参謀の日中戦争に反対したような方向をたどれば、前大戦の悲劇的結末を避けることができたのはいうまでもない。

（平成二十五年八月十二日受理）

［注記］

平成二十五年、三上一夫先生が三度にわたって本会事務局に寄稿された論稿を、ご遺族の同意を得て掲載した。いずれも先生ご自身の校正を経ておらず、その意味では未完成の論稿である点はご了承いただきたい。しかし、これらの論稿からは、その旺盛な執筆意欲や研究への真摯な姿勢が伝わり、また晩年の関心の所在もうかがえる。そのため、あえて遺稿の形で掲載させていただくことにした。

（事務局）